様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月　８ 日現在

機関番号：２４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０１９９３

研究課題名（和文）現代日本における労働者の熟練衰退に関する知識社会学的研究

研究課題名（英文）Tha Deskilling of Workers in Contemporary Japan: from Perspectives of Sociology of Knowledge

研究代表者
倉田　良樹（Kurata, Yoshiki）

福知山公立大学・地域経営学部・教授

研究者番号：６０１６１７４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、「熟練」を「労働者が自らの仕事を遂行するために使っている知識」と定義して、熟練に関する社会科学的研究の水準を向上するための理論的な研究をおこなった。知識社会学と労働社会学の既存文献を批判的に検討するとともに、哲学、人類学、教育学、組織論などの諸理論と諸概念を吸収することで、熟練を研究するための新たな論理地図を獲得することができた。この論理地図を用いて、現代日本の労働者の熟練について新たな視点から論ずることができるようになる。従来受け入れられてきた通説が見逃してきた、様々な研究課題を提出することもできるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1980年代から1990年代にかけて、日本企業の良好なパフォーマンスを現代日本の職場における労働者の熟練によって説明しようとする経営学や労働経済学の研究が日本の内外において通説として受容されていた。他方、日本経済が低迷を続ける00年代以降においては、情報技術分野などを事例とした、職場における労働者の熟練衰退に言及する学術的な言説が登場するようになった。本研究は、これらの既存研究とは全く異なる視点から熟練概念を再定義するとともに、熟練研究のための新たな論理地図を開発した。これによれば、人工知能などの新技術が労働者の熟練衰退をもたらす、といった議論が根拠のないものであることを示すことができる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we define skill as the knowledge that workers use to perform their tasks. We aim to improve the theoretical study of the workers’ skill in the field of social sciences. The main research of critical literature studies was performed on the sociology of work and sociology of knowledge. We also surveyed theories and concepts on skills developed by philosophy, anthropology, pedagogy, and organizational studies. As a result of the research, we could get a new and original logical geography which could be applied to the workers’ skill in the workplace.
By adopting this framework, we are able to explain true problems of workers’ skill in contemporary Japan. We can also present many important research questions which has been lost in the mainstream academic discourses on skill.

研究分野：労働社会学

キーワード：熟練　知識社会学　批判的実在論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

「現代日本における熟練衰退に関する知識社会学的研究」
研究成果報告

１．研究開始当初の背景

2010 年前後から、現代日本の労働者が職場において発揮している熟練の性質に関して、社会科学研究者の間で、真っ向から対立する二つの見解が相争う状況が生まれていた。

一方では、製造業を中心とした日本企業が、２０世紀の後半において発揮した良好なパフォーマンスを、生産現場で働く労働者の高度な熟練によって説明する言説が、1980 年代と 90 年代において通説として受容された後、今日に至っても、日本内外の社会科学研究者の間で一定の支持を獲得し続けている。これらの議論を支持する人々は、1980 年代に登場した、製造業生産労働者が工場の現場の生産活動において発揮しているとされる「知的熟練」という概念や、1990 年代に登場した、本社間接部門の中間管理職層が業務運営において巧みに運用しているとされる「暗黙知」という概念を中心に、日本の労働者の熟練を肯定的に説明することが、今日においても有効であることを主張している。

他方では、日本経済が低迷を続ける 00 年代以後において、日本企業における熟練衰退を指摘する学術言説が登場し、日本企業の情報技術を中心とする先端技術分野の停滞との関係で労働者の熟練衰退を論じようとしている。これらの言説によれば、日本企業に固有の職場慣行が、労働者による独創的な知識営みを阻害することで、日本の情報技術産業の競争力に悪影響を及ぼしているとされ、日本の労働者の熟練は否定的に評価されている。労働経済学、経営学、労働社会学などの研究において、日本の労働者の熟練の評価をめぐって、対立する二つの見解が相争う状況が生まれていた。

２．研究の目的

本研究の第一の目的は、現代日本における労働者の熟練に関する理解を深めるために、熟練に関する既存の社会科学的な理論研究の成果を総括的にサーベイして、熟練研究に関する明確な論理地図を描き出すことである。本研究の第二の目的は、こうした明確な論理地図に依拠して、熟練研究に有効に活用することのできる概念枠組みを構築することである。こうした概念枠組みは、研究課題に応じて、論理地図の中の特定部分を切り出すことで、いくつも産出できるような性格のものでなければならない。本研究は、この二つの作業を通じて、混迷する日本の熟練研究に対して一石を投じることを目指している。

なお、こうした論理地図や概念枠組みの有効性については、本来であれば、具体的な研究課題を設定した実証研究を積み重ねることによって示されるべきものであるが、そうした実証研究については、後述するコロナ禍という制約条件もあって、本研究によって達成することはできなかった。この点は今後の研究を積み重ねることによって果たしていきたい。

３．研究の方法

当初の計画では、文献サーベイによる理論研究と並行して、製造業生産労働者と情報サービス産業の技術者を対象とした職場の観察や聞き取りを行うことを予定していた。だが、新型コロナウィルス感染症の影響によって、職場への訪問自体が著しく困難となる、という状況が続くなか、本研究は文献サーベイによる理論研究に徹するという方針に切り替えることを余儀なくされたのであった。

文献研究の主たる対象として最初に行ったのは、現代日本の熟練研究にも強い影響力を持つ、熟練研究の通説に対する批判的な検討である。主要なターゲットとして、主流派経済学における「人的資本理論」と経営組織論における「知識創造理論」を取り上げ、その理論的な前提が根拠に乏しいものであることを明らかにした。これら通説に対する代替理論として注目したのが、労働社会学と知識社会学である。また、本研究では、熟練研究に関する広い視野からの論理地図を描くうえで、社会学を補完するものとして、熟練に関連する哲学、人類学、教育学、組織論などの関連諸学による研究成果を取り入れていった。このことで、より広くかつ高度な理論的考察を行った。

また、論理地図を描くにあたっては、社会科学の様々なディシプリンをより高階の視点に立って統合するメタ理論として、批判的実在論の知見を積極的に活用した。

４．研究成果

本研究の第一の目的に関しては、熟練研究をより広い意味での「知識の社会理論」の論理地図の中に位置づけることが有効であることがわかった。労働者の熟練を含む知識一般に関する人文・社会科学的研究の論理地図とは、「知識はどこに存在するのか」という存在論的な問いと「知識をどう説明するか」という認識論的な問いを二つの座標軸として交錯させて、考えるべき課題の全体像を描き出すものである。そのさい、全体の構図は、存在論的な問いに答える二つの立場である「知識の内在説」と「知識の外在説」、そして認識論的な問いに答える二つの立場である「機能主義的な説明」と「本質主義的な説明」を対置することによって描き出される。この論理地図の要素となるべき諸概念とその配置については、具体的な研究課題に取り組むなかで、より具体的な内容を確定させていくことができるだろう。

なお、論理地図を描く作業とは、理論研究の限界点を明示することでもある。通説的な熟練研究がしばしば、理論研究の境界の外にある恣意的な概念に依拠した擬似理論に陥っていることも明らかとなった。

本研究の第二の目的に関しては、具体的な研究課題に即した実証研究を遂行するなかで、今後達成されていくものというほかない。だが、本研究を通じて、既存の熟練研究とは全く異なる視点から熟練を再定義し、熟練研究のためのオリジナルな概念枠組みを開発することが可能であるという展望を得ることができた。1で示した熟練論争の諸言説は、研究課題にふさわしい適切な概念枠組みを欠いていることが明らかで、この論争全体が、論点を噛み合わせることが不可能な疑似論争に終わっていると言わざるを得ない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 井上徹、倉田良樹	４．巻 12
２．論文標題 移民政策なき外国人労働者政策を擁護する知識人たち（２）：やさしい日本語・日本語学校	５．発行年 2020年
３．雑誌名 一橋社会科学	６．最初と最後の頁 37-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/31042	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 井上徹、倉田良樹	４．巻 12
２．論文標題 移民政策なき外国人労働者政策を擁護する知識人たち（１）：多文化共生社会論	５．発行年 2020年
３．雑誌名 一橋社会科学	６．最初と最後の頁 27-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/31041	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 倉田良樹	４．巻 11
２．論文標題 構造化理論から知識の社会学へ（４）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 一橋社会科学	６．最初と最後の頁 69-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/30513	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 津崎克彦	４．巻 －
２．論文標題 はじめに「日本の外国人労働者--働く現場と産業・歴史から考える」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 津崎克彦編著「産業構造の変化と外国人労働者--労働現場の実態と歴史的視点」明石書店（図書所収論文）	６．最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 津崎克彦	４．巻 －
２．論文標題 第1章「 現代日本における産業構造の変化と外国人労働者」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 津崎克彦編著「産業構造の変化と外国人労働者--労働現場の実態と歴史的視点」明石書店（図書所収論文）	６．最初と最後の頁 17-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	津崎　克彦 (Tsuzaki Katsuhiko) (00599087)	四天王寺大学・人文社会学部・講師 (34420)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関